

# St. Luke's International University Repository

“When I am no longer even a memory . . . ”

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Florence Nightingale, vice, recording 作成者: 助川, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/383">http://hdl.handle.net/10285/383</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## “When I am no longer even a memory…”

助川 尚子<sup>1)</sup>

### 要 旨

今や情報科学の発達によって、過去の偉大な人物の声もインターネットを通して接することができる時代となった。19世紀後半エディソンの蓄音機の発明によって、ナイティンゲールの声も歴史に残ることになった。

本稿はまず1890年に録音された、フローレンス・ナイティンゲールの肉声のレコーディングとその声の特徴について考察する。続いて半世紀も眠っていたこの歴史的な原盤が、米国人の声の収集家ヴァインセントの手によって取り上げられ、1939年アデレード・ナッティングのスピーチと共に始めて後世に残るもっとも精度の高い録音として誕生するまでのエピソードを記す。

### キーワード

フローレンス・ナイティンゲール、声、レコーディング

### はじめに

津田梅子（1869～1933）が1913年3月、津田英学塾の卒業生に与えた英文の塾長訓辞の原稿が、長年同大図書館の倉庫に死蔵されていたところ、最近発見され、このたびレーザーによる読み込み技術を駆使して86年ぶりにCDに再録され日の目を見ることになったという。今更ながら録音のテクノロジーの進歩に驚かされると共に新しい世紀を迎えるに当たっての人間の過去の遺産継承への熱い思いがここにも伺われる。

さて、前世紀も終わりに近い、1890年夏、71才のナイティンゲールの肉声がエジソンの発明した当時の最新の録音技術を使って録音された。以下の言葉がそれである。

When I am no longer even a memory — just a name, I hope my voice brings to history the great work of my life. God bless my dear old comrades of Balaclava and bring them safe to shore<sup>1)</sup>.

（私という人間がもはや過去のひとつの記録に残る人物ではなく、単に一個の名前になってしまうとき、私の生涯の大仕事が私の声によって歴史に蘇るように望みます。

神よ、親愛なるバラクラヴァの古き戦友達に恵みを与え、恙なく上陸させ給え。）

半世紀後の1939年になって、眠っていたこの声の原盤が再録されたが、その折には米国看護界の大御所、Adelaide Nutting（アデレード・ナッティング）によるナイティンゲールの紹介のスピーチが同時に録音された。最近、筆者のもとに届いたのはそのカセットテープのコピーである。オリジナルは“Nightingale-Nutting Recording”として歴史にも残る録音である。音声は余り明瞭でないが、60年前の米国、100年前の英国にしばしタイムスリップして、二人の大人物の声に耳を傾けるのは感慨深いものがあった。

このテープはロチェスター大学看護名誉学部長、（本学にも1987年に客員教授として3ヶ月程滞在）Loretta Ford（ロレッタ・フォード）教授の御好意によるものである。Ford教授御夫妻とは、10年来個人的に交流があり、筆者が本年3月ニューヨークでのTESOL（英語教育）学会参加の帰途、避寒先のフロリダを訪れ、お目にかかった。その折、筆者がナイティンゲールのことについて熱心に質問していたのを覚えていて、「この偉大な人物を理解する参考に」と前述のテープを送って下さった。

今世紀最後の年に、1890年と1939年にかけての、こ

1) 聖路加看護大学教授（英語）

の録音に至るいきさつをナイティンゲールの声に関する考察と共に辿って見るのは興味深いと考え、探ってみた。あいにく資料不足で満足のゆく結果とはいえないが、以下に記してみる。

## 蓄音機の発明 (1877年)

蓄音機 phonograph (現在のレコードプレーヤー)の原型は1877年米国の発明家Thomas Edison (トマス・エディソン)によって1877年にこの世に誕生した。円筒のシリンドーに録音し、針が、回転するシリンドーに刻まれた溝を上下に移動することによって音を記録する装置である。

実際に肉声を録音することが出来るようになるのに10年後1880年代の終わりである。1889年にはヴィクトリア女王の声がワックスシリンドーに刻まれた。この間1887年には同じく米国生まれのEmile Berliner (エミール・ベルリナー)によって平板ディスク(gramophone)が発明され、多量の音楽家の演奏レコードの生産がプレーヤーの改善に拍車をかけたが、レコードの原盤を作る方法は翌20世紀を待たないと解決出来なかった。

## ナイティンゲールの声の録音 (1890年)

エディソン研究所の英国の代理人であるGeorge F. Gouraud (ジョージ・F・グーロード)は、ナイティンゲールの声を録音に残したいと計画し、最新の録音機に何かしゃべってほしいと依頼し承諾が得られた。録音当日、1890年7月7日、ナイティンゲールは当時71才、暑い夏のロンドンのサウスストリートの自宅でベッドに半ば身を横たえながら、この歴史的な偉業を成し遂げた。ナイティンゲールはゆったりしたタフタ衣に身をまとい銀髪にレースのショールをかぶって、グーロード一行を迎えたと、伝えられている<sup>2)</sup>。

このようにして冒頭のメッセージがナイティンゲールその人の生の声で収録されることになる。当日ナイティンゲールの緊張した様子は、冒頭のメッセージの最初の3語 When I am の音声にうかがえるが、その後は自然にクリミアの古い戦友への深い思いを込めたメッセージが続いている。クリミア戦争、殊にバラクラヴァの激しい戦いで多くの死傷兵を目のあたりにしたナイティンゲールは、兵士達と共有した瞬間をいつまでも忘れることが出来ず、劣悪な衛生環境や栄養不足から、かの地に命を落とし帰らぬ兵士達への鎮魂の思いがこの短いメッセージに込められている様だ。事実ナイティンゲールはクリミアから帰国後、長いこと彼らに対する自責の念を禁じ得なかったことが、私記

などにも記されている<sup>3)</sup>。

## ナイティンゲールの声

ナイティンゲールはどのような声の持ち主であったのだろうか。その名の如く、“うぐいす (nightingale)の調べ(notes)”の様であったのだろうか。筆者が*As Miss Nightingale Said...* (ナイティンゲールのことば—その光と影)や、*Notes on Nursing* (看護覚え書)の翻訳に取り組みながら、文献資料に接してまず気づいたことは、ナイティンゲールは音声に対して非常に細やかな神経を使っていたことである。

*Notes on Nursing* において「音」に関する章では、病人に対して話しかける時は葬儀屋のようにわざとらしくとりつくろった声や同情めいた声をいましめ、ごく自然な声で話すのが聞き手の神経を安らかにしている。病人に何かを読み聞かせる時は、ゆっくり、はっきりと大きな声でしっかり語りかけるようにするのが良いとしている<sup>4)</sup>。また、今日の音楽療法のはしりともいえる音楽の効用を説いている箇所では、病人には音が流れるように継続する管楽器や弦楽器と共に、人間の声は効果があるとしているのは、自身の声も含めて音声への関心を物語る。

ナイティンゲールの「語りかけるような」発声法は、1872年～1900年の間、聖トマス看護学校の研修生や卒後看護婦に毎年送った14の書簡<sup>5)</sup>の簡潔で説得的なスタイルからも伺われる。ナイティンゲール自身は、これを自ら訓示したのではなく、事務長のヴァーニーやボナム・カーターに代読させたとはいえ、その行間からはその朗々とした声が聞こえそうである。声のエロキューションを含めたプレゼンテーションについては、若い頃父親ウイリアムから受けた教育の中に、アリストテレスの弁論術もおそらく、はいつていたことと思われる。しかしクリミア戦争後、英国陸軍の衛生管理状態をその綿密な統計データや報告書を盾に糾弾した王立調査委員会をはじめとして、ナイティンゲールはいつも「声高に」まくしたてる傾向があったと、言われている。

若い頃から素養として受けた声楽のレッスンや、17才から2年間、家族と共に出かけた欧州旅行をきっかけに夢中になったオペラ通いという恵まれた音楽環境の中で、「偉大な人間性と希有な性格を表する不思議な力」を持っていたその声はナイティンゲールの大きな資質のひとつと考えられる。

伝記や書簡等にも、ナイティンゲールは美しい声と説得力のある声を持っていたことが記されている。Edward Cook (エドワード・クック)は「ナイティンゲールの伝記」の中で、ナイティンゲールの友人の女

流詩人 Lady Lovelace (ラヴレス夫人) の詩作“A Portrait Taken for Life” (生涯のポートレート) にふれて、若い頃のナイティンゲールが精神的に何か超然とした所があることを強調したあと、その声について“soft and silver” (柔らかく、はっきりと高め) と形容している<sup>6)</sup>。“silver”は、韻律の関係から“silvery”の“y”を脱落させたもので、「はっきりとしたピッチの高い声」の意味がある。同書の日本語でこの箇所が「低い声」と訳されていたので、筆者の抱く「やや高めの」ナイティンゲールの声のイメージとは反対なので、奇異に感じ再度原典と照らし合わせてみたところ、前述のことが判明した。事実、今回図らずも入手したナイティンゲールの肉声がテープから流れる声は、高くはっきりとして力強さがうかがわれるものであった。

71歳とはいえその声は、まだまだ活力溢れる勢いがあり、健康状態の良好さも感じ取られる。

その頃、藤元の聖トマス看護学校では、教育や管理の諸問題がナイティンゲールの頭を悩ましていたものの、米国ではナイティンゲール式の看護教育が全米で広まり始めいろいろなアドバイスやメッセージが求められた。

さて、その美声が晩年まで衰えていなかったのは1899年3月、前述の津田梅子がナイティンゲールをロンドンのサウス・ストリートの邸宅に訪問した時の日記からも伺われる。

梅子は米国のデンバー市で開催された第4回万国婦人連合会婦人代表として、日清戦争(1894~95)の勝利後、日本の存在を欧米にアピールすべく派遣された。3月とはいえ、みぞれまじりの、どんよりとした日の午後、梅子はロンドンのパーク・レーンのサウスストリートの私邸にナイティンゲールを訪ねている。「How good of you to come, such a bad day” (こんなひどいお天気の日、よくおいで下さいました) ということばを伝える明るい元気な声 (bright, cheery) がひびきわたった。」<sup>7)</sup>と梅子はその日1899年3月30日の日記に記している。日英両国の教育や女性の地位について過去から現在未来へと話が交わされ、梅子は時が経つのも忘れ、いとまを乞う頃には暗くなりかけていた。アフターヌーン・ティーに引き留められるのも辞し、贈られたスマイレの花束を胸に深い感銘を受けて帰路についたとのことである。翌1900年に、津田英学塾開学を目前に控えた梅子39才の春であった。

20世紀が明けて数年後、Adelade Nuttingも80才を過ぎたナイティンゲールを私邸にたづねている。その時の模様を伝える1939年のNuttingによる、ナイティンゲールの声の録音のご披露の祝辞の中で、女史はその声が“the surprisingly strong pure voice” (驚くほど力強く澄んだ声) であったと印象深く述べている<sup>8)</sup>。

晩年、視力が次第に衰えてくると、ナイティンゲールは自らは書くことも読むことも出来なくなったが、近親の子供達がやってきては、本を読み聞かせてくれた。ナイティンゲールは活動的な人物の伝記類、殊にルーズベルトのそれなどには手をたたくて喜んだとのことである。読んでもらったお礼にMiltonやShelleyの詩を朗読したり、イタリアやフランスの歌を昔と変わらぬ甘く華やかな声調で歌い、時にはその声が部屋中にひびきわたる位であった。

性格的に、万事目立つことは好まなかったナイティンゲールも自分の美声には自信があったのであろう。また長いこと自責の念にかられた、クリミヤの兵士の死に対する共感と鎮魂の思いを永遠に残す機会として、この録音に協力したのではないのだろうか。

## ナイティンゲールの声の録音の再生

米国ではグラハム・ベルの電話機の発明という画期的な出来事があったが、この貴重な録音は再生のすべもなく、ロンドンのベル・エディソン研究所に何年も埋蔵されていた。その後エジソンが予言した通り、完全な再生法が発明されたが、ナイティンゲールの録音の原盤は、海を越えてニュージャージーのエディソン研究所に渡り、そこでも手つかずのまま塵にまみれて保管され、死蔵される運命にあった。

ところがこの盤が、George R. Vincent (ジョージ・R・ヴィンセント) という米国の声の収集家の目に止まることになった。Vincentは学生の頃から、歴史に残る偉人の声の収集に異常な情熱を示し、ルーズベルトを始めとして、ロイド・ジョージやバーナード・ショウなど、当時の数々の有名人の肉声を録音していた。

エジソンの蓄音機の発明から年月を経て、音声の録音はかなり改良されていた。1935年にはロンドンのCancer Committee (がん委員会) が基金集めの一助にナイティンゲールのことばのオリジナル盤をレコード盤に再録して販売しようと試みた。セントルイスの全米病院連盟の大会でこれを披露したが、録音技術の劣悪なため聞くに耐えない結果となったそうである。この間の事情は*The Trained Nurse and Hospital Review* に詳しい記述がある<sup>9)</sup>。

何とか看護学校のためにも良質の録音盤を作成しなければということで、紆余曲折を経て、The National Vocarium\*の技師らがVincentの指揮のもと同誌の

\*National Vocarium は1900年初頭から1920年頃に存在した個人 (George R. Vincent) 所有の声の収集館。現在はワシントンの国会図書館が管理している。

援助と依頼によって、遂に1939年9月念願の録音が行われる。この時は特製のサファイア針がはじめて使われたとのことである。

80才のNuttingは、健康を害していたがこの日のために体調を整え、ナイティンゲールの人類への素晴らしい功績を含蓄のある表現で高らかに讃えた後、かの有名な一節“When I am …”を紹介するのである。この世紀のレコード録音は後世に残る、最高のものであるといわれている。ナイティンゲールの録音は、*Time* (タイム) 誌 (1939, April 10, P.43)もThe National Vocariumの声のコレクションの中で、最も感動的であると伝えている。

その後、この録音がはじめて一般公開されたのは、同年ケンタッキー州の看護婦協会の年次総会においてであった。ナイティンゲールの言葉を紹介するNuttingのスピーチの最後の部分を以下に記しておこう。

Now that Florence Nightingale is with us only in rich and precious memory and in great and living tradition, it is a rare privilege to be given the opportunity to introduce her, by listening to her speech through the medium of the phonograph record, her

actual words recorded in London in 1890. I have the honor of presenting the voice of Nightingale<sup>10)</sup>.

## おわりに

今やマルチメディアの発達により、クリックするだけでインターネットを通してナイティンゲールの声が聞ける時代となった。しかし、そのオリジナルが一世紀以上前に収録され半世紀前に、今日聴取可能な精度の良い状態で再録された経緯は特筆すべきことである。

人類の看護・医療のために多大な貢献をしたナイティンゲールの功績は、多くの文献から伺うことが出来るが、今やその肉声の録音をも聞くことが出来ることは、この偉大な人物に対して更なる理解と関心を深めることだろう。

最後に、この論文を起稿するきっかけを作った、Dr. Lorreta Fordに感謝の意を表したいと思う。

なお、このテープは助川の私物であるが、劣化を防ぐためMDに再録し、いずれ本学図書館に保管をお願いするつもりである。

## 引用文献

- 1) Transcription of Recording of the voice of Florence Nightingale with introduction by Adelaide M. Nutting. Transcribed at Illinois Wesleyan University, 1982.
- 2) The Trained Nurse and Hospital Review : The Story of the Nightingale-Nutting Record: 103(10), 418-421, 1939.
- 3) Baly, Monica E.: As Miss Nightingale Said. London: Scutari Press, 32, 1991.
- 4) Skretkowicz, Victor (ed) : Florence Nightingale's Notes on Nursing, London : Scutari Press, 77 - 79, 1992.
- 5) ロザリンド・ナッシュ編：(教文館訳)「ナイティンゲール書簡集」, 教文館, 1939. Improvement, 33(1), 51-54, 1996
- 6) Cook, Edward T. :The life of Florence Nightingale, London: Macmillan, 38, 1913.
- 7) 津田梅子：津田梅子文書, 津田塾大学, 335-336, 1980. 1)
- 8) 前掲 1)
- 9) 前掲 2) p.420.
- 10) 前掲 1)

## 参考文献

- 1) Brown, Pam : Florence Nightingale. London: Exley Publications, Ltd., 1991.
- 2) Cook, Edward T. : The life of Florence Nightingale., Vol I II, London: Macmillan, 1913. Encyclopedia Britannica (updated)
- 3) Funaki Yoshiko : The White Plum, New York: Weatherhill, 96 ~ 97, 1991.
- 4) Funaki Y. et al : The Attic Letters, New York: Weatherhill, 1991.
- 5) Haxley E.: Florence Nightingale, London: Widenfeld and Nicolson, 1975.
- 6) Microsoft Corporation : Encarda 95, 1995.
- 7) 助川尚子：津田梅子先生とナイティンゲールの出会いの時に思いをはせる, 津田塾だより, 46(2), 津田塾同窓会, 1996.
- 8) 柴田礼子：ナイティンゲールに関する2, 3の資料紹介と考察, 看護教育, 15(4), 医学書院, 272 - 279, 1974.
- 9) 山崎孝子：津田梅子, 吉川弘文館, 169 - 170, 1981.
- 10) 湯楨ます監修：ナイティンゲール著作集, 現代社, 1974.

## “When I am no longer even a memory…”

Hisako Sukegawa<sup>1)</sup>

The recent progress of information technology has even made it possible for us to hear the voices of great leaders in the history through internet. The voice of Florence Nightingale is no exception. This monograph reports how the real voice of Florence Nightingale was originally recorded in 1890, and was reproduced, after an interval of half a century, into the form of the present refined recording for posterity. The episode of the historic reproduction of the original with an introduction by Adelaide Nutting is exposed while discussing the characteristics of Nightingale's voice itself.

### Key words

Florence Nightingale, voice, recording

---

1) St. Luke's College of Nursing